

2-3 タヌキ

【分布】

タヌキは昔から人々の身近で暮らしてきた動物である。そのため、昔話などにも多く登場し野生動物の中で最も知られた存在となっている(写真2-3-1)。現在でも山間部から農村地帯、市街地まで広く生息しその存在感は大きい(図2-3)。

【生息環境、形態的特性、基本生態】

成獣の大きさは尾まで含めて50～70cm、体重が平均で4kg程度である。外見的特徴は目の周辺を覆う黒い部分(アイマスク)と背中から前肢にかけての黒いバンドである写真(写真2-3-2)。ヒゲは黒く目立たない。繁殖は2月頃から始まり、5月～6月が出産のピークとなる。産仔数は1～7頭で平均では5頭。生まれた子は真っ黒なのでよくクマの子と間違えられる。

活動は主に夜間であるが昼間も活動(動画4)する。夫婦単位で生活(動画5)し明確な生活エリアを持っている。この生活エリアを示すものが「ため糞」である。ため糞は生活エリアの境界に作られる。農地に作られることも多くタヌキ被害として報告される場合もある。「ため糞」は生活エリアの境界を主張するものなので掃除してもすぐに作られるやっかいな被害である(写真2-3-3、2-3-4)。

休息場所は神社仏閣、空き家など建築物の床下やキツネ、アナグマが掘った巣穴(古巣)を利用(動画1)する。

農業者からは「タヌキは悪いことはしないから…」との声をよく聞く。実際はどうだろうか。アライグマやハクビシン、カラスの被害に隠れてしまって表に出ないだけで、現場では多くの被害が発生している。

タヌキは加害獣としての認識が低く、他の鳥獣被害と誤認されることが多い。対策は加害獣を特定することが重要だ。隠れている被害を見抜けずに対応すると効果は得られない。タヌキの仕業と断定するためには現場に残された痕跡が手掛かりになる。特徴は被害現場が散らかっていることと被害作物をどこかに運んで食べることである。タヌキは噛み癖(動画3)があり意外と荒っぽい食べ方をする。地際の枝が折れたり、ツルが引っ張られたりするの噛み癖のためである。そして作物が運ばれていたら決定的である。運ぶ場所は決まっていないため様々な場所に被害作物が散乱する(写真2-3-5、2-3-6)。

被害現場には足跡も残されているはずである。イヌ科の動物なので地面につく指の数は4本である(写真2-3-7、2-3-8)。マルチや除草シート上は確認しやすい。

タヌキは登ることが得意ではない。登れないわけではないが得意ではないので選択する優先順位としては低く

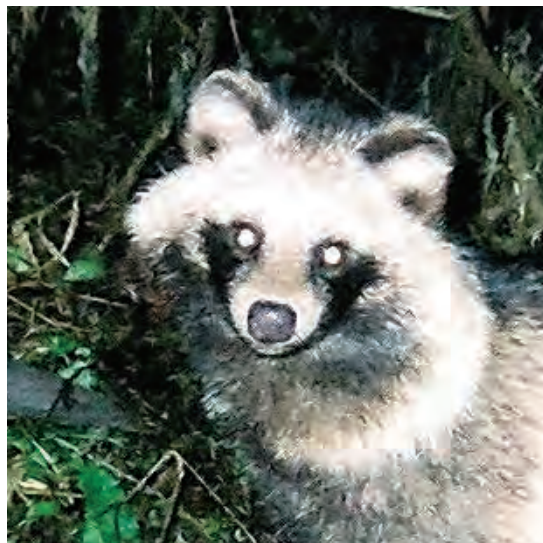


写真2-3-1 黒いアイマスク
(ヒゲは黒いので目立たない)



写真2-3-2 肩から前肢にかけての黒いバンドが識別ポイント

なる。このような動物は掘ることと破くことが優先されるので地上付近の対策が重要である。



写真2-3-3 竹林内のため糞



写真2-3-4 防草シート上のため糞

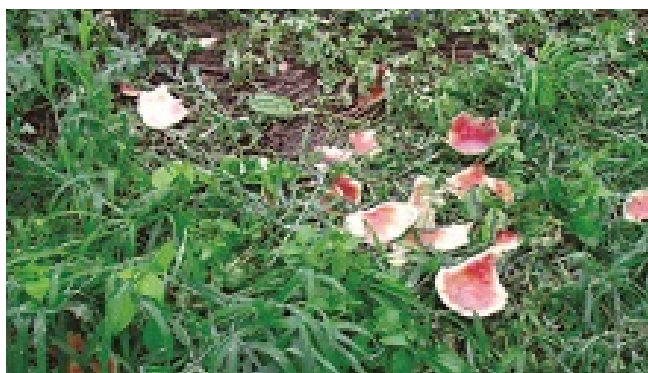


写真2-3-5 食べ散らかされたすいか

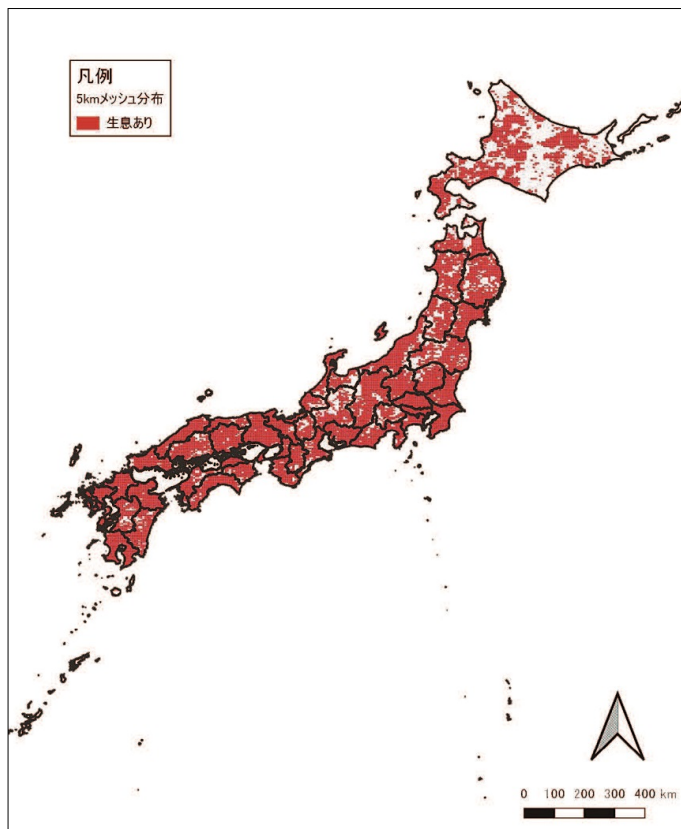


図2-3 タヌキの分布図(環境省)



写真2-3-6 運ばれて食べられたとうもろこし



写真2-3-7 指の跡は4本で爪が目立つ



写真2-3-8 指の跡は4本で爪が目立つ



動画1_アナグマの
穴を利用



動画2_フェンスの
下から侵入



動画3_噛みつき



動画4_昼間の採食



動画5_夫婦で生活